湖月抄

尊經閣文庫

末摘花

并 源氏十七歳の春より同年の冬まての事あり

若紫の并なり 横竪とて若紫ハ源十七歳の三月より同年の冬まてのことあり 此巻ハ若紫の以前源十七の二月より次の年の春まての事あり 是を横竪と云之欤 并

詞を以て為巻ノ名ニ 詞ニ云

哥ニ云 なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖にふれけん

此巻ハ常陸宮の姫君を末摘花の御事とかきたる也 ゆへ乃名とす

紅の花ハ末よりさけハやかてすゑよりつむによりて末摘花といふ 此鼻あかきによりていへるなるへし

思へども猶あかざりし夕顔の露におくれし心地を 年月ふれどおぼしわすれず ここもかしこもうちとけぬかぎりのけしきばみ心ふかきかたの御いどましさに けぢかくうちとけたりしあはれに似るものなう恋しくおもほえ給ふ いかでことごとしきおぼえはなく いとらうたげならん人のつつましき事なからん見つけてしがなと こりずまにおぼしわたれば すこしゆゑづきてきこゆるわたりには 御耳とどめ給はぬくまなきに さてもやとおぼしよるばかりのけはひあるあたりには 一くだりをもほのめかし給ふめり

夕顔巻まで手て書かれく　花鳥余情集に両説ハ嫡くのころも書まゝにされ　花ハ志れし　師　山本春正
帚木とされし
院にハなせまひて法忌ましての日よりりの集よハ嫡ハことにゐることもとおり
御はゞかりし　細　桃戯みじのんおくくかくかちの上ハ戯みをも女しことこ原ハ如る抱をうりし抱と
ことし花司馬相如琴のころとて卓文君を挑とより桃ハ女の心をさそふべしとてのんハ新しり
なをりかくべきやうのんく戯とかうむるとえん叶てり　孟　挑也アラソフ心く
いそらとくし死せがしらふとらうすけのんんの　孟　夕かのころつきのやうなる人にもかなしく　細
うのらを筆末の抱然よりながりのもとく　師　前抱情よ書て世よありとなるてれどもさいかひあべ
まさらん葎の門よ思ひのかにらうげなるんの人のくらられおもんしもくらうちらしめつしく
みわしめてい姿ころのすんられんハ夕顔のさらさきん人の世の情りなさへとくなく
こりと魚よみもするさ名にてらぬ人しつくうぬ世よりまか人ハ　師　夕かのよのれす
のさあへの抱さひよれちらむててとも　細　いるかなくもかはとむかもとくまつひのまけ書おとれハまあく
ひそこゆへづるそ　孟　をきつもありてにいらとも人がはさてさんハきてらとを?そ　みあく
こそも中　師　彼岸身もしめま中にそれあくもやんのとするしもおしのかしのわするま

わとちかね　箋　ゆにかけ(にしかは)もる
き人のとりさとりふ
さそしそるてしそてさて
箋　実法そ思も不実とも云

なびきさゆのしもてかくれたるハかさく
あつまじらぞいとめかれうるやつまじかうり
ぞびちぬもありてく
めつるさハるよしへなすくし情とらうしまあや
をろく
くさなしおまりめのほとよしぬやうるみ
さてしともぐしてて彼名姉すくげと

のおひさし侍る
箋　これハ源の志あてのまうとをくとまりとひとてとるとを
なまさむやうまわらくて
させうるはすき男よおひ
ゑさるふるそとそしれく
けよりの空蝉　細　空蝉田舎
へ下向の後のうへ家傳ありまして
常紀子大江中ぐ　さるりとよ空
蝉にしりありつめてさ海くり
まはとまく
みりけのちられけれして海ハ
細　おくらの荻の葉おし時の
るすく　師　荻のかまよくろへつ
くりて竹の軒よろしく(?)の紀
ゑ集ののめ紀く　細　源の乳母
く大貳の乳母につきそハなし
出つのあ紀く是源ハ大切よ志
かわれしし
わもんよくとりの兵部卿ハ大輔
河　玉鬘　家毎等論　出源氏を云
く王の字をくへし　経中も
世雄無等論妙智無等論
なとと云(?)くし　弘安の源氏

まて何(花よあつめたまへんちく)くしきうちまさまけのたとし
そろそもあれハのおひさしつるをゆやうるに
よるの空蝉(うつせみ)とりのゆりくにき絶にて海の
しハ荻(をぎ)の葉(は)もさりかべき風のをうろ(細　源の荻の葉よ)
わりとさへ地(ち)ろしたかなりのわくーかぐ
けのまうれたかいしきのまいさやうよいくも
らす何もゆうりて大(細　源の性を来くて是ハさら兼ぶ語く)ゝなさめうく捕しとき
れなとそえし終りそりとる意のめ紀とく
て大貳(に)のあるれさしつざよわけるかとむさ
め大輔の命婦とそ(内裏ノ)しるまさふして婦わくむ(和　ことへハ主)
孫よそのあう人の兵部大輔か女(むすめ)なるとそく
ぐとりの兵部大輔なるかむさめなるも
まいしいうりとこのめうわうハ(わうらくふーへ)あくあり

論語にも新行説として今の義を純義と定められ畢。一説我無篤論。又云和漢通戈字
通和漢欲云云。此義無其謂不可用之。孟王孫として性を不賜平人。又ちかんと読り
のみ見えもむかしハ秘事とすといへる也
さてハちくぜんのかみとはめのとの
師らくぜのかみとしもいへし
孟大輔の命婦ハ其母筑前守の妻
備ヨ離別して今ハ筑前守の
の妻也
らくぎみのもとをさとにて
て行かよふ　孟末摘の父宮
也　師此説されどもわろきか
常陸宮とつとめたるか
細流にも此説あり。
奥入にも此説。又一説には父
君ハ兵部大輔也。母ハ筑前へ
行し故父のもとを里とする也
こひたち　ほしよりも備令
婦が彼女へ事にあり。仍後の
源氏の仰へのしむ。ひたちの宮と
八常陸太守に任ぜられ給ふ也。末
摘花の父宮也　花　光孝天
皇承和六年正月任常陸
太守。其後貞純親王代明
親王元長親王等任也

きみもめしつかひなどし給ふ。はゝは
ちくぜんのかみのめにてくだりにければ
ちゝぎみのもとをさとにてゆきかよふ。こひた
ちのみこのすゑにまうけていみじうかなしう
かしづき給ひし御むすめ心ぼそくてのこり
ゐたるをもののついでにかたりきこえ
ければあはれのことやとて御心とゞめて
とひきゝ給ふ。こゝろばへかたちなど
ふかきかたはえしり侍らず。かいひそめ
人うとうもてなし給へばさべきよひなど

明考　續日本紀第五承和
五年正月庚申朔壬申四
品忠良親王為常陸太守
従五位下藤原朝臣貞公
為介

嵯峨天皇
├仁明天皇　諱正良
└忠良親王　二品式部卿　貞観十八二二十二薨五十八

ものごしにてぞかたらひ侍る。きんをぞなつかしきかたらひ人と思へるときこゆれば
細　大輔命婦
三つのとも　細　楽天北窓三友　琴・詩・酒也　河　今日北窓下、自問何所為、欣然得三友

らゆうなどものごしにてぞかたらひ侍る。きんを
ぞなつかしきかたらひ人と思へるときこゆれば
みつのともにて今ひとくさやうたてあらんとて
我にきかせよ。ちゝみこのさやうのかたにいと
よしづきてものし給ひければ、おしなべての
手にはあらじと思ふとのたまへば、さやうに
きこしめすばかりにはあらずやあらんといへど
御心とまるばかりきこえなすを、いたうけしき
ばましや。このごろのおぼろ月夜にしのびて
ものせん。まかでよとのたまへば、わづらはしと
思へど、うちわたりものどやかなる春のつれ
づれにまかでぬ。ちゝの大輔の君は
ほかにぞすみける。ここにはときどき
ぞかよひける

友三友者為誰琴罷輒挙酒酒罷輒吟詩三友遞相引循環無已時一弾愜中心一詠暢四支猶恐中有間以醉弥縫之　白氏文集

のまへらさ　細　河海徳ノ宰ところく但酒のうちまで盃気狂ハ女の学ぶべんもつきなうくさうなり
まうてかして　令嬢も其附おまよ内裏を退かして末摘へまゐれとなり
海へ陪くのあふりハ
細　其アノ大輔がおもつのめのとの孫ケリむかくさらが裏ハ令嬢も其母も
とハらての家のうちかくよまよ
らて君のうちにせ星かくと
其けるのうちや　孟　令嬢
も里にあるか時も末摘の許へ
まへまゐりく
かのくきむへさ　勝秋の
琴あるの音に浪あるらへ
き秋かもかくぬおさ
ゐ後あるこよわさうりて
浪の人末摘の押さもさるる
へ引て独をかとに作かる
れとなり
うしろめくうりしきるし
と云と　孟　源引れより
てさへかなりろめくさう
と令嬢かろ之或伝云令嬢

つきひけるが、令嬢ハましらくのかさりハもとこ
と侍らきて、おめづらの浪のかさりともつひく。
末摘の方へ
うきゆへかなかなりの紅しも忘らく、いざ
細　浪の名ての糸ハおもてゐるも
しひの月払しき浪にもかかりうらうら
末摘の方へ
細　令嬢覚
さつうつれもすぐうれ月の夜さもひへき秋
師　浪の情おのさうろうきことどうして
ね
のさ縁かを待しざめかわきさてゆれども
とあおきよわかりてでさてひとこゑ弁をば
しらとよしむなしくえらんが弥さうべ
紙　内々の方へ令嬢か吾つるのをしかるへし
さみしくのまへぞからけきうさくなるを
へなりてうちろめくうつくで世はれしやと

かうてよ来て居か方よ
浪をあらきられそうらけ
あしとく
ゆくのきをいひよ　そこち
もせくの音のきうからぬへ
うぢ和のき浪よ徳引きされ
てゆよまうりまうさらく
ふかはさうし記つく入よ
内裏の御簾くよ隣たるさに
琴とどえさうぬて口傷るる之
うたう人こそ　花　伯牙
弾琴鐘子期知音しらん
く　お六帖に　このねどうるし
あか人のあるへよ今をさ　孟令
ら果しそくもつてへさ
嬢をさうしてもろ人とうへり
かくしれよ　孟　百歳よまるろ人
よ秘さゝく　細　令嬢ハ百歳に
なみ人をもやう上手よまゐる
やさみそれいゝ　こゝくし
かのねかくのそうかくとれか
孟引のあいひハかうきる中ハる
きれとも僞変のそうちえ詩
あれそて然と涙の名よきう

細　末摘の手しゅうして方へ令嬢のまつりく
出へどもんでんよまつりきれえむまごりうきた
あふさしなてし
もされがし梅のうゆりしき残をいづしてを
末摘の方へ
令嬢なる
のしあふきをかりうみしてあひて流しのき
細　令嬢かすしくれ
いろなまうり待るんとあひさ雨へと向く
よるれけるひよさそきれ待りてかんぐわ
はあしきさいで入よえうけさまちくぬ
末摘御く　表ハさうへきそ
こそらうしきれとえハざうもうへこそわ
細　令嬢の名く涙の徳らる品
あれ、かしなよりよ人のうてうへやりと
梨花さく
てめしすくとおいるりくゝくて独もんを
末摘の琴を引まてや
ひねつぶう浪のうみりさるへしのよあしう
涙末摘の琴をまちて
出色、たまでくりつうさてなしねどかの
ねぐくのすうしとかかう掲きれハ出ふくても

すみくし師宣琴ハすくちり
嵩らくのちくれさら思ちな
斉ねと云嵩らるハ人ゝちかず
とふよゆれし
りつさらく人ちら古ん斉斉
すく　文の素誥どりし此
さきのかし古の名跡もなく
みやうにあれかれ文のまた
まひろう訳よをとさてもたち
んと此由而よのこし給ひんを
源のちかちとく
むかしゆるらつみも　花ろ
あのらしゆる女 御息所之 妻之
宿女十五のとし御くれぬ
女一人のこりてあさはやど
もみなこおちくちりてくて
さんでんづらわづおびるく
岬のやうになりくさらに附の
大臣と居清親あつて家蔵よ
まうて給て比家のすへどさ
すふよあひくて給へろわこ
忝きつらきよりてゆとし
さきぬらの様ど乃給へき
此女のみるとてこなせてるか

ゆかされども　いとかうあれはてさび
しき所よさはりの人乃かよめり
さらざくりつさくらきん斉斉る
くらるゆえりのとさてしるらしんやう
の所にこそ　着物語かとおくれれなうこと
ざきびりきれなし　立ひつきくりのやい
ひらし海とゆがまど　ちらつけゆやゆかさ
んとちろちげりしくて　やそしひさの斉
娘がどあろりのふくいくこなしも世な
らじと思ひされども　かりらよ給めりまら
うちのらんと待りつ　いとひかゆもそ
今ひのどうるよとどうらし参りちんとそ

うしのつゞよさらすりくろくるよ人斉ちうさ所よんかけたからまつみしさちりれとあ
それよ跡かれさく家蔵よまうて給くあちびどさて御給よわつく志知らみつく人のん
よりかりて申しきれハ此家よとくまつ給ぬべきろ川の所あれゆくらつ思ひかうさらむあし
人の心入てつてろひし所なれバ兄常ゆからりつ子のまひらさの中よりつてくろ人もなく
心よまりせらくゆいあつろ草木のまゝ紀さず時をもられぬゆりくぬかさやと八表よ心
かそく虫のねうられくさて申りよ月ちあいく事れくむらしれけしもりをさてもちりつき
架さくに光をやせろりかとみふハいよらりよさかそけるをとなりむさん人もおひやら
まさくむしさしもあまろ数多と家勝すまり知まりうちょり給らん人にそゆりよ
うれのまりけう女のてよるりて可哀但只よりまでへっり此比能多かりへし
のりせとし云へしとく
令嬢かどあつりのふく　令嬢心志らひして夫へるよ知せもてもろ
かへて琵一曲をまた世よされよふりうらかと空の手をよふく
まらくさのさんと待りつ　令嬢源の方へ参らんとそてえあろと
のまんのくるよと白みかるしまうかなんかりやうれるとゆてもえし
りてひかかもとて　まうくさのらんとえし令娘つれぬよ居りをハ参るとよひて居ぬりと
立ひ給とんろつれゆへおつらん久しく
今ふのくるまを　とハ助まし静かをさとらをゆろんとも
すろくなちれとかそ
あまりよか寒すまへハうりてき　琵とあまり名日せさらしく
うなよをとれり給ひそやと　いろうもそぞのさそくりされハおなりく
ゆろるかくりく
わくふとのまよ　盃切ル今しおたか　かり程ゆかくをやさぬられりの宿多く程
うきさかうさりけて今かせ。　みとあしそてねさらしのきふ常をゆうし
師 此ろかうそハそ一きゆう一八

源のらく細よ八のおかしおる
と切てかりしと切りしものとよ
めり。源の清氣なる清ならに大きう
らく令娘の思ふべきく
こゝろりうてでとらへ八
細 令娘ハんつなひて師母く
うくせんとありくるく
おまさとありくるり　孟 教導
云ッ令娘が末摘のるへどかる
よしやと源のこゝもおうるまで
ん成ありて　細 ふるうよりて
人あらのやうにいおうまし也
と令娘の身よをことりの也
假よされも人を　師云 ふかく
しきんへして假よものさち
あともされさるうにをらい
分際くよきりかすくされ
いらずが父の小娘なれバを
しくらわさいあずいならく
義よわかつく人のいおらく
あれも　細 故常陸父のまるの
ゆるらく　師云 故父のるりたと
源の御かりしめしつく義よ因

見しまう。めりじやんのぢらきほどのさとく
ひきちごうでせき紛しゝの縁へとしころよ
らくてとらへハのぞゐやいとらものもあり有様
よおりひきらてこゝろくりしげよすの
しあふめる絵かしろめされさ唐めやとくらく
だげぬさとあるし。紙よ哥をもんもうち
とけてうしふ歯さんのさはしきりしてそ
あれ子ぞ。義り出傍うし人のはれぞとされ
バ縁さやうのまーさ絵ほのめりをとうゝる
ひきふさゝ歎まるうやあらんいとものび
てく人見よ御ふう人のまかへり出はしま
もとしすてかやまうてくさせのふて　それら

いりくらして末摘の新たれ
とをたり
ろ人のすめよめりしまほと
細 源の実法よすしまれ出
を内裏よ作あつきやや
らなり
こと人のいてんやうよと
るるあくとされそ
令娘の好きしする身そして
人のことハるをあくハせそ
なるの事を好きしとつそ
八令娘の身為なしいろしれ
るふあんとくし。此令娘ハ
ほめのとれよるれハうくの縁
ちんてんのうこに　末摘のうさ
をゆりしくらで面をたつひ
のふてしやせんとて寝夜驚
へ立おのまくて
そいらい
孟 遠垣なり上

しらふまてうておりく侍れぞやうの
はやつま深あき。いりくハはとんど流きん
とききあれバふりくうちとりくひらく。
ことへのいんやうよとぐれあくつされそ。
られさわざくきさうまひとりぞ。女乃
首様くうしつんとのうまへバおちりいろ
めつうりとゆかりくおくきうの縁よを
え川しとひて抱といろバきんでんはるる
よ人のそらひきくやうりやてみしてや
とうめうぐりあふきんばいのかでそとらし
あれのくりゆうくれのことよましるとあふ
よすしきてもう男さもり。紙あ　ふん

あやしきむまにかりぎぬすがたの 花 狩衣姿[illegible]
[illegible]
それハ内より退出の時より
[illegible]装束[illegible]
[illegible]
を但馬守[illegible]
[illegible]内[illegible]衣[illegible]
[illegible]
[illegible]
を狩衣[illegible]

[illegible]に 頭中将[illegible]
と源の[illegible]
[illegible] 孟 源の末摘へ
[illegible]頭中
[illegible]

たれならんこゝろかけたるすきものありけりとおぼして
かげにつきてたちかくれ給へば頭中将な
りけりこの夕つかたうちよりもろともに
まかで給ひけるやがて大殿にもよらず二条
院にもあらでひきわかれ給ひけるをいづちならんと
たゞならで我もゆくかたあれどあとにつきて
うかゞひけりあやしきむまにかりぎぬ
すがたのないがしろにてきければえしり給は
ぬにさすがにかうことかたに入給ひぬれば
こゝろもえずおもひけるほどに物のねにきゝつ
いてたてるにかへりやいで給ふとしたまつな
りけり君ハたれともえ見わき給はで我と

[illegible]
孟 天蹤地蹐のこと[illegible]
[illegible]俗[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 孟 頭中将[illegible]源
[illegible]
[illegible]
細 大内山ハ
[illegible]内裏[illegible]
[illegible] 孟 内裏[illegible]
[illegible]源
[illegible]頭中将の[illegible]
[illegible] 花 帝王系図註
宇多院山陵在大内山
和寺西ニ今ハ大内山ハ
仁和寺の[illegible]
[illegible]
[illegible]三位を
守護[illegible]
[illegible]大内山の[illegible]
[illegible]の月ハ

しられじとぬきあしにあゆみのき給ふにふと
よりてふり捨させ給へるつらさに御おく
りつかうまつりつるハ
もろともに大内山ハいでつれどいるかた
見せぬいざよひの月とうらむるもねた
けれどこの君とみ給ふにすこしをかしう
なりぬ人のおもひよらぬことよとにくむ
〱
源 里わかぬかげをば見れどゆく月のいる
さの山をたれかたづぬるかうしたひありか
ばいかにせさせ給はんときこえ給ふまこと
はかやうの御ありきにはずいじんからこそ

やすらふ月よね遠山へ侶上みとのさしむの月出し此種のくわり十六日の月といへるなりやれ
おつかし 師 十六日ものうへしとなく
さくわりぬ 細 雨の白きく月とばらばて雑とめかれとも入がたく
ねくさらぬ月の知りとしられども山のはのうちに
ところよくへしより 又いるさの山へ但るの名所也

給ひくこそあしめやつれたる御ありさまは
うつくしきこともおきたてんとやうくしい
さあらそもうつりのへみつけらるゝ女郎
ふしと比せとゝのかぞしこゑえてね

とゝかへりかゝん此給
ふと源氏の君のあり
よりさこうよ 孟 初ハ此
ひろく人のつゝしむべく
基よあり 師 此中の源の芸
あらさと見付て云それわさる
なと源もしりてあるなと給
ふひさしく基の初めの元
てたり
とのくらされる 源も此中
をかまへふかみれと思はさ
れおひて給ひるてかも其
ひろ車にのりて給ふとく
人の扇よ 細 物衣のあるを
と衣よ給ふ物衣
ふりかのて女衣を物衣よ
給めてかのて又妻も女衣よ
かくれきるなるべし

あかぬ袖よりさらにほけたるのゝしらるゝ
物しいかゞとのく思ひれるゝかもおほへ
てえゆきわれ給て殿ひとり車にのる
く月のいとしさわびしに雲かくれたる道の
程もありてあるそて大殿よりかしてぬかれ
なきもおほくと給ふには思ひてゐらくひとく
ぬらしたまひけるそしめてさる人給つれな
うつくしきやかておくほ給ふともとわさとそこ
ひくかゝりふてはかくいつもそてとそうし
給ひて御涙とりおほくまでいとまあり
おほされていとかゝしうかはまいけんと
見してかとにみはるゝあらたえて

頭の君　細 頭中将の心かけ
けるとはかりてもてはなれて源
りの君をとりわく思ひて大宮
にもかくれなく源の御方へ
まゐりたまへるをそしりきこえ
たり　師 絶えてみたてまつらぬ
所にかけはなれん事
もさすがに心ほそき
也　細 中務の心
也源と一向に見えぬものに
なりなんはさすがなり
孟 末摘の事也
師 葵上の女房と見えたり
末摘の心も思ひの外なる
すまひなどを
師 ありつる琴
しのびてかくれ
てうちとけぬ人
なるべし

人々にひかせ給ふ。中務の君わざとび
はひけど頭の君心かけたるをも
てはなれてたゞこのたまさかなる御け
しきのなつかしきをばえそむきき
こえぬにおのづからかくれなくて大宮なども
よろしからずおぼしなりたればもの思
はしくはしたなき心ちしてすさまじげ
によりふしたり。たえて見奉らぬ所に
かけはなれなんもさすがに心ぼそくおもひ
みだれたり。君たちはありつる琴のねを
おぼし出てあはれげなりつるすまひのさまなど
も、やうかへてをかしうおもひつゞけ

中のおもむきなどもしりて思へる
ところ
わりなくあはれなる人
かやうの世のならひも皆人
ねたくおもひよるべきことなく
このさまなく
と心わきまへ　孟 源の
ことなき中のさまなる
そのふるまひさまあるべき
末摘へ源と頭中将ある
ときは人しれずいかにせん
とゞめん源よりの
又不堪なる所へなどせんこと
細 まさしくさては過ぐし給はじと
なかんづく中将の心なり
いつもはかなきいたづら
事に心つくしつゝあること
なるべし
その返事のこたへ
孟 木草空のけしきにつけても
ひたすら心をつくせる
ところあるべし

あらましごとにいとをかしうらうたき人のさて年
月をかさねゐたらん時見そめていみじう
心ぐるしくは人にももてさはがるば
かりやわが心もさまあしからん
などさへ中将はおもひけり。この君のかくけ
しきばみありき給ふをまさにさてはすぐし
給ひてんやとなまねたうあやふがりけり。
そののちこなたかなたより文などやり
給ふべし。いづれも返りごと見えずおぼつかな
く心やましきにあまりうたてもあるかなさ
やうなるすまひする人はものおもひしりた
るけしきはかなき木草空の

ありく比中。らうにえうりうんよ未摘をうひきて。らうかゐよ源を比りハてみうらうちて
きえんハられうしううんと笑て含ぬとうりうひき
人のん代のぐやうなうろけるく　鏡人のんうしくて女のさうりうく人比やさく又れ爪ふれ
年さと爪しまうてりのおうとるてて　師　源ハ心のとどうきるハけらさと女の源とれむまうれ
みぐうらでとやうくち爪びたらう　みちさじえ去わられつあてぞのづうし源もとも系ろ方次
おやまうみもたかうう。おうとくこれ源の心えもうさうしくハおうて真よ未摘をとち上
よ未摘のあうきぬ。叙ろくうらのやうくうむらおをとすくむやるくて源の出んとへりと
のこころの之　孟　叙ろるよハ女の人乃比ふるうろきうて男のあやまちにをうるすのあう々人是ハ尖
るるれとくろをのまうふとあり難れけさる

いてやまうたゆりたかうろひさき
屋どりみは
源のぬうすふ風流たろうこの
文さりあうよおかけづく只猶
でこしおふうるのぬとよは
あひかるひまうんと之
孟いたが門の催楽の詞河
後よりり河いとうかとせ
なが門羽をさぶうるひてやわ
がゆうかひがらきさの気まや
やうらん去てふるさきおや

げうしわづおやまちよたらりめへきふら佐
のどううふうくゆやりしらうれりうくあけうひ（孟　叙兄才比文猜も乞くきこぞとく之）
うしもうもたうう。うちろやまうりうん人ゑ。
ちくなんらうきうんべきをとものまへいげで（細　含嫌詞）
やさやうにゆうしれかさのけれうるやどりよハ（気やうりおとど云く之）
えしかやとつきたけるてそこし作れひと（やどりおとと云く之　末摘）
へよ物づこし。ぬきさりうるうさうしも。ふり（のきぬ。をとこ之　助字之）

しりうやとりやうらうそ
まうしもしまでたをさき

洗りわかれそのあよ
孟　是ハ末摘の事ハ乃なる之
摘の並之
ろうくやうに　細　末摘乃
雪の始とゆかどけく之　孟是
うり黛の並之
あさぬきうの老を
気みてしめようして夕良の
宿れかうかとりふりうり　細　夕良
此との一周忌よ成るり

ろつもて　世人よ似もつ
忠ゑりきんたり

ぐううめのしめふ人へうりなんとうろあり（世よわうらくきてまてとく之）
さ海うらりさこしむらうくじうかげどゆへ（細　源心へどうちて云ゑ之）
きとうろういなきこれめりうとこめりし（末やうたるとし）
うゆかしるんへそらくうていおうへあ
並しとゆ佃しまそれなどのあふわうしいやうこよ
まづくひさまひへ去れぬりのさいのまぢ（夜蚕のうちれ物をのへ）
並もけんのいと海なさきこやうめうく去夜さ（ないさうすぎ）
ぬ秋のけ佃ひ去けうりゆかりつけそう（源心へ）
のきぬしの声もうくよつきそゆくふくり（を　きて）
しきくへしひ去うゆ佃もしうちまうにふさ（末摘卷）
たのさそゆけ去たくゆあしまへどおた銭（きて）
ゆかつくなりけさあれくじよづりそふや（人目よ多く在りてとも多るこ　源心へ）

いろいろやうにて
源氏の須磨にやうりつまるる
さいろいろゆへにて

そそるるれく
細 哀のつきかたにて
源氏は
つゝをし給ゆへにて
仲 未摘の所を令殺り案
にて細 此上のことは略句と
てまゝゝ句と文章乃
御し 新注
仲 未摘も
つゝん
つゝて
くよりひ
よりせ源を
ませいま摘も同
しゝ

まゝうゝまぐていやまぐれにうろさへそ
ひて令殺をせめ給ふいうるのやうぞい
とうゝるこゝとにもまぐこゝろゝねゝいと
よのゝて思ひてのゝへいとおゝとも
ひくゝりてゝゝられてめげなゝこゝとを
細令殺の須磨
ゆゝじけ作ゝゝぐゝぐゝたゝこのはゝりの川く
細 ゝゝゝ海ゝ
ゝのゝりなゝこゝよゝてゝゝえゝさゝ生ゝゝ海ゝゝぬ
ゝゝんゝゝ海のゝふゝゝ此ゆれゝゝゝれゝてゝた
ゝげゝぬゝゝゝる
釈兄弟
ゝゝ

源と内裏ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

（末摘花の）
（細）
（孟）
（源氏のおうぼう）
（源氏の）
（末摘花）
（孟源の）
（細）
（孟源の）
（細）
（末摘花）
（細）
（細）
（細

[illegible]

河はなともいとあるに
孟 不辞退 さもさうにて人
のかもとうはせまうまつる
いとへさこそで
細 是答などいかなりてそ
こけとうべかりうそ
はありなんとて
まのこなどはいかんなりう仰
なん 細 余姫の用
仰さうして深と貴みなど
よきさ仰んとうはあるとと
どしらてあいくしれはよ
あまひうとい 孟 深のとて
けるさはあるまーさ余
ぬうはせはまの用あ
とまのきはかりう深よ
細 余姫など安きうあ
あへーー唯孟曰

[illegible]
なれなどうんぼとされ有徳よたんぶを
つまをびはがたどうはばさなんとそと
そへへ空角 未稿の祈とうて すぐよ人のつんとはうう
をいなびぬはんめそいへへうとしでよで
をけとあばぐうしそどさてあり
なんとのまどのこなどいれんなうはな
んどしらておんくをされるなひまど
いうもうどいくうくいひまておさまのき
いなう深みまはづいとつうくうて深
深の用あをとそ
をうくいとをさつくうはいとつまし
げよはがられどうやうのんよりめいつう

孟 主人亡身之
仰 未摘のうあへ

うらうん人よとそ
孟 深のの深をはをうあ
うう人よとせうとうと
伝のうへあうはいはううを
未稿をうひううを余姫
うあへうへ人 光へ

んあどへなどと要とうとうう深はば
をれだ余姫のううはとまはやうとそ
てはりひて孟曹司房へ
などいはうはうしはめのとはいおいへ
はうう深なうはうはうはうはよう
深のうとうはれはのう深とゆうはれあうれ
はうはうはうはうはうはうはうはうはう
りひまのうはてはうははうはうはう
しうはれはなうはうへうはひ空ゆれはうはじ
未稿の元はうはうはうはうはうはうはうはう
ははなうはうはうはうはうはうはうはう
業業はうはうはうはうはうはうはう
こはいとつうはうはうはうはう
いうはうはうはうはうはうはうはう
てはうはうはうはうはうはうはう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今ハ人ハ物のつひえとハ言ものつゝぐ行ふよと者ハ用ひ人ハ物ハ
〜進退幸のゝく物ゝと言ものゝつくりまれ
しまうとぞまいまもうとる泣進退とぞまいて
を後べさうや弋公泣声を用ゐ天文八年五月十一日於議定所講談の時泣中とりて云く
日本紀曰俯仰嗟咽進退而血泣懷抱無所誰言 垂仁天皇巻
よりけうをゝく河 絆 仰 くゝ物て玉ものゝ
ゝ物つゝて 花ものゝくゝと言にゝて俗つゝ
ゝくゝ俗みどの俗俗の時俗義者ゝをつゝ 俗俗仰 ゝゝゝゝゝ
を通ぞゝくゝつゝて言ゝめゝゝゝゝ
ひおぬゝゝをゝゝまゝゝゝゝゝゝ
くハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 師 試樂也 樂のうしく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

孟衡黒

孟老人

細原の作者

細原の作者

細原の作者

うみのくまは　いのさは
濁点付ス　河濁くさうり
場同事く　時ハ　ハ
うりはとみえ
ゆるし色　細花色説可考
花云　延喜十七年奏議三善
清行請禁深紅衣服奏議
云　但浅紅軽黄未及大色
者不在制限云　今案紅
紫深色禁色とかけば浅
色とゆるし色とえ制禁
よ及ぶ雅と著もろ有
く禁色と穏されて著用
のあく深き色とゆるし色
とえ統ハ謂く　暁　紅の落
きいろ
るぐりあうくろうくろさ
細ろさとハ紫のもく
ろしくろ色　河　謝有太宰
女ものに名ものく或説云女房
ハ美人名をろく　花云　掛
よ大ホきホ掛ハ宮一の人あ
ろ一ものの名ものくまぬの上
にうりさと上よホ掛をろ

とろ物りしくえづくしさうあのそれ
ざうんよ折ろやくれさもうぶりらつこか　髪　頭
このくまはバ　助詞也
まの若垂髪　ほのくまと
とやうひくりてげめく　ほんそこ
女の髪末く　ゆくんぐみとゆくくとろうず
くろのをくよあ面りてひりれる細
一尺ぐらわりくくんとくぶうの　髪先
ちよくへいひくりのひぐるくやくを
ぶでぐれ　髪　束　和語　人のはくくくとくを
ハぶりいひくれゆくいくのりなくうく　是より髪束の品く聴色
ちびてくけくりくりくひとくれるぐりなくくさ　紫色ハ高もく方
りづくくくくくねてうハぶよくうくされうれぶぬ
くくくくくく

ぎーさくさく人　細　改官こ
で弁が納言内記外記史などと云へるなり
明治改のうく　仰　改官ハ大
政官ーそてトの改と行ふ三公
納言参議ぎーの下につて
こ事とーり行ふ弁官
が納言をじ公事ーかじ
よわるけのぐとうりてい
うりうりてあるく　仰　書搦
の　海松表　木とうこ
ゆうく似ちとゆまわく
ゆーれ人なこ
盃　この行をえるよ
こにかるくさ人ちなこ
ゑうーひうりのいくく
てとんーーゆのわぐ事を
ーうく

釈日本紀　細　今書搦の
ゆうく来じむりれこ
ゆのわとえくみハ只みる
南産をえくれのうひの
くうーけく変ハをぐれた

河　俊光官
ーうくーぐうーれくんのわりあこう
ゆぐりうーて　ちすぐようーうこ
ゆうーれ　ゆーーるうもくうびーうーいこれ
ゆくわくれよて　いぐぐいそぐおすぐれも
ーうくれ　細　俊の四
ーうくれ　俊光は男うくく
ーうくれ　俊の四
ーうくれ　俊の四
ーうくれ　俊の四

仰合ぬ　しかあるを　ぐんとさきひろん　えのたち
うるとは　ぬ　ぐんと
さきひろん　と
うつくしかりけるかの
白白卯く　橘の　宮れ　ぐんれ
ちうう　やこ　ぬ　れの　ぐん
と　枝の　ぬ　ぐん
名よりも　ぬの　細　川　行　手
天只　宮の　ぬ　と　ぬ　と　ぬ　紙
神八　名よ　ぬ　ぬの　れ　山　う　空
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
浦　ぬ　ぬ　宮　八　白　波　乃
ぬ　の　れ　山　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　今
素　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

げてみんとさくひ打も清くあはそろ〜うち〜事とゝのはれ〜ゝ
たくん〜〜〜

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

神さるはさん人もなくさ 細流 [illegible]

の神さうはさん人もあ[illegible]

[illegible]に 佛源の山神めぐ[illegible]

[illegible]ては [illegible]

[illegible]の山志は [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

なつかしさ　細　源氏後撰の歌云なつかしー　河万葉
そもそもいつ　古今　人もれぬ思ひ入ぬるー　紅のまつむ花の色にて
てまつりつむ　源　まを梅花ー　紅の色ー　紅の花はまことにそえん　紅の花
ゆゑ　細　紅の色ー　孟　今
年の月　河　人とつむ　源の歌　源氏物
ゆゑ　細　令和　梅　令和　梅
ゆゑ　令和　梅　令和　梅
月　令和　月　令和　月
月　令和　月　令和　月
月　令和　月　令和　月

花改事要略衛門府風俗哥云多く良女の花の如加攻祢利好年夜減紫色好年夜ごとらの花はうぐむめの花ゝゝるゝとまやまれるゝなるや宮殿ゝゝひりのゝはゝごらめの花と
いとゝぶ梅の花ゝゝるゝ保はのゝ梅ゝゝうひわりとは久紅ゝ末つむの臭れゝこのあゝさゝ
らんゝめゝゝ志拾は考陸の文乃姫君なれば兄三笠山乃ゝとめゝはのゝつゝりゝめゝよのゝ
落社ゝゝゝゝふ附その所れゝをゝゝゝありゝ春日みてハ三笠の山乃ゝとめゝうゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ三笠の山れゝゝゝゝゝゝ

市橋この年うりこの女房ともに批判しこれ

男ども　年始の祝儀式等

うるはしき年とこのそなへあく

へめりあるくこと

河男貂奇八聖武天皇天

平元年正月十四日始有

男貂奇女貂奇八天平十

四年正月十六日天皇御

宴安殿宴群臣酒酣奏五

節四舞更令少年童女貂

河豆盤勝也　初巻より

もみこと

節会こそ　宴より入こ

年白馬を比八ひろかこと

うれしうかくへ　河天

武天皇十年正月七日御

向安殿宴二群　礼記に春

と東郊よりのり七日陽の数

四月八日陽の月に白八五行性

又五八陽の獣を八素の色に

白うとこれ八年中邪気を

除くとこれ文なり

ものうりこの年うりこの女房ともに批判しこれ

男ども　年始の祝儀式等

うるはしき年とこのそなへあく

へめりあるくこと

河男貂奇八聖武天皇天

平元年正月十四日始有

男貂奇女貂奇八天平十

四年正月十六日天皇御

宴安殿宴群臣酒酣奏五

節四舞更令少年童女貂

河豆盤勝也　初巻より

もみこと

節会こそ　宴より入こ

年白馬を比八ひろかこと

うれしうかくへ　河天

武天皇十年正月七日御

向安殿宴二群　礼記に春

と東郊よりのり七日陽の数

四月八日陽の月に白八五行性

又五八陽の獣を八素の色に

白うとこれ八年中邪気を

除くこと

河　婀娜　遊仙窟　窈窕

市橋の歌の

生るとりあんとまつ

うん時いうれしうんの

心

いとおもしろくはなやかにて
孟子の母おのが母なりとて
つけるひーにうりあり
あるこかたそこ
細上下つきうちもきの
みやうぶーとの紫震殿
ちごのめくし孟氏相手
きもうくをたくへー
おうちくいとしーなし
孟氏の勝息ようちうり
ておりをーぐ後巻ようち
うりてい襲のそうけ
ようとうこうひまく乗
きはらーとひきうのまく
たくへー一注孟母きの
たーかの
うくーきいうくーけく
けのくこ
河鏡臺
唐更撥上図撥鬢の
具入うちの一強うちうち
四し
まるはりーしん 孟氏り
たりまひーせ来とをきて
志賀のたうしも孟氏い

まてんいとしおりーるーしりのうりよのぎ
果
ふくてくーこ海こでげうくそくーこせ
てぐうしけて
髪
とくろひ絵ようなうろめきこうるこ
やうぎのうーうーげうーけのくこたぐ
素逆れおくへー
かいうーこうぐまよ
細ゆうこのれ具ふ古家のれおうくへー
かめくあるこのれのとまへ
女のさうそ
細ゆうる孟氏の
かーはありーーこのうろぐへをまれが
てまーーをうりとーーー

[illegible]

花山海經云東海有黑齒國其俗婦人齒黑染今案日本八東海の中の国也彼俗よりふりや昔八知さ女八たをるくるをとりけれ八古代のおくし君のをうつうた紫八姫君も十筆まあるまそもしろめをうしーをり所古代のおくし君のれをつーしてふりめるうび君とをこそ服よりて由くくろめるをれるつまをまてとふくく長菴詠

歯黒めれ
設けるまめの黛八眉よりくくろくろくしをもと

[illegible]

歯黒めれ女張あり

歯黒めれ

[illegible]

源の観念く

[illegible]

紙にんぎ書

[illegible]

第上の歯くきかく

[illegible]

紙ほしく

[illegible]

花書稿の歌

[illegible]

歯書稿の歌を絵よ書てもく

[illegible]

[illegible]

紫の上のごくくろ

一段よ書稿のくくろ

河

平仲ハ平貞文ノ孫

平仲ハ平貞文ノ孫

儒者よりれハあざるを

てあををはまあり氏のくる

家をくくろそくくそ平

仲と云河宇治大納言物語云貞文ハ女のりにはそ

ものくまをやて双のあをふ

くくろにはそ国をうめりー

りくを女ハはそ是をまりそ

今くりけりをもーでみぬし

れハ女装をうんをそ浅る

秋よーそくくくハ是くみを

世人よまくくくのけ

しくを大和物語河内古今よ

双物よ家を初くーてを

をくくそ平仲くくくを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]